

血圧の変動パターンにより脳卒中リスクを予測

高血圧は、脳卒中リスクのうち改善可能な因子である。血圧と脳卒中との関連性は、ほとんどが1回または平均の血圧値によるものである。しかしながら高齢者においては、血圧は変動することが多いため、本研究では長期的な血圧変動と脳卒中および死亡リスクの関連について検討した。

オランダ・ロッテルダムの住民 6,745 人を対象に（55～106 歳、女性 60%）、20 年間で 5 回の収縮期血圧のデータを集めた。その結果、4 つの血圧変動パターンが特定でき、最も多かったのが正常血圧 120mmHg から 160mmHg へ徐々に上昇するパターン（クラス 1、n=4,938）であった。次いで中年期は正常血圧で、急激に上昇し非常に高くなるパターン（クラス 2；120～200mmHg、n=822）、中年期から中等度の高血圧で変わらないパターン（クラス 3；平均して 140mmHg、n=870）、中年期から重度の高血圧のパターン（クラス 4；平均して 160mmHg、n=115）となった。クラス 2 とクラス 4 では、クラス 1 と比べて脳卒中リスクと死亡リスクが高かった。クラス 3 では、死亡リスクについてはクラス 1 と同程度であったが、脳卒中リスクは高かった。

したがって、中年期から血圧が急激に上昇するパターンと中年期から重度の高血圧であるパターンでは、脳卒中と死亡のリスクが高くなることが示され、脳卒中や死亡のリスクを予測するには、長期的な血圧変動パターンをみることが有用であることが示唆された。

出典：Hypertension. 2016; 67(6): 1126-1132